

一年の軍隊生活は果して我に何を教へしか

一ケ年の軍隊生活は果して

我に何を教へしか

(その一)

思へ、心せば一翻の落英にすら、眞理はこもり、大空に懸れる。片月にも無限のさざしは讀まるゝもの、況んや、身は全く別の社會の集團の軍隊に投じて、而も一ケ年の久しき身を軍務に奉じたるものをや、自分の神経は、尠からず鈍い、慧眼なる人々が、いろくゝの想像を廻らし、いろくゝの考を涌き起す材料があつても、それほごに思はず

に何もしらずに過ぎたことも多分あつたらうと思ふ、が然し小さいものは小いなりに鈍いものは鈍いなりに感ずる。

初め自分が入營した當時には斯ふ思つた、自分はあらゆる方面に於て、観察を逞ふし、其上に及ぶ丈け研究がして見度い、其他に大切な事は、日々軍隊でやる處の事柄を悉く修養の材料にし様と思つたことであつた。譬へば、體操をやるにしても、只上官がやらせるから、やらなければならぬと言ふ丈けよりも、自分は此體操によつて、正しい姿勢を造り、より丈夫に、より強健にしなければならぬ、即ち言ひかへて見ると自分の身體は此體操のお蔭で日々夜々に、正しくなり、又強壯になり行きつゝあるのだと思へば、決して人事では無い直接自

分の事なんだもの、同じ體操をやる上に於ても大に望がある、大に愉快がある、又體操に歩調をつける、歩調が小いとか、歩調に元氣がないとて、八ヶ間敷言はれるが、自分はこれをも、修養の一つにし度いと思つて、出來得る丈け大きな聲を擧げる事に勉めた、修養によつて一定度まで、聲が成長すると言ふことは確に事實である、聲の生れつき小いものは非常な損がある、例へば、大衆の前で何か話をする、此時に聲が小くて、どうも一般に聞きとれないと言ふ事であれば、實に悔しい次第で、音聲は確に演説の有力なる武器である、蚊のうなる様な聲で、大衆の膽を奪ふ事は、劍を棄て、敵の首を刳ねんとするに同じである。

斯くの如くにして、悉くを修養の資に供したが、果して自分は、どれ丈け學ぶ處があつたか、それは直接と、間接とに於て尠くは無いと思ふ、今悉くこれを書き盡すわけには參らぬけれど、其概略をしるして見度いと思ふ。

第一には奮闘と言ふ事である。

一體「奮闘的生涯」と言ふ事は、自己一身を通じての標語として選んで居る言葉であるが、自分は軍隊に這入つて、尙ほ、痛切に感じたのである。

事に因果の存するは、恐らく不變の眞理だらう、思へ大なる事業の影には、必ず大なる原動力が宿つて居る、奮闘なくして、光榮ある大事

をなさんとするものは、木に縁つて魚を需むるよりも尙ほ難い。

古往今來、世に名をなし、業を遂げたもの、中で、誰か奮闘なしに、成功したものがあつたらうか、奮闘はあらゆる社會の人が經過すべき道徑にして、若し此道の通過を望まぬ人は、決して高嶺の月を見るわけには行かぬ、軍人も、學者も、商人も、職人も、工業家も、農夫も必ず其道に奮闘を要する事は決して異なる處はない。

奮闘は、勝利を意味して居る、奮闘を経たるものにして、初めて光榮ある名譽の凱歌を奏する事が出来る。

人生は轉た風雲の多いものである、若し奮闘の精神が缺けて居るなら、艱難辛苦と言ふ敵には、決して勝つ事は出来ぬ、萬難次ぎ至れども屈

せず、百苦我を襲へども動かす、堂々として奮闘す、人生之より快事なることがあるだらうか、奮闘的精神は、即ち進取積極的精神にして、少くとも二十世紀の我等は、此めざましき精神を發揮し、修養して、天下の大業にとりかゝらねばならぬ、若し我等軍人に此心なからましかば、それこそ名計りの兵隊にして、何のなす處もない、我等は、幾度となく雨にふられ、風に吹かれ、日一日に強くならねばならぬ、此奮闘的修養と奮闘的習慣とは、我等をして、光榮の冠を頂かしむる處の、有力なる武器である。

(その二)

奮闘の方面は、あらゆる處にある、衣食住は、申すまでも無く、精神の方面には、どれだけあるか解からぬ、ピスマルクは、普佛戦争の際、陛下と共に食事をなし「シヤンパン」の大製造家に、宿泊したるにも係らず、襦袢一つ無き哀れなる状態、推察せよと妻へ書を送つた、かれは實に衣類とすら戦つたのである。

ナポレオンの如きも、十六の時に父を亡ひ、八人の兄弟と而して三五五になる母になつた、母の難澁は勿論であるが、ナポレオン自身の悲嘆惱煩と慷慨奮發の心とは、洵に察するに餘りある事だ、けれども彼は、パリーの兵學校にあつて、此愁嘆と、悲境とに向つて大奮闘をなして勝利を得た、斯く難行苦行の境を通過すると共に、彼れの奮闘力は益強く、はた高くなつたのに相違は無い、『艱難汝を玉にす』と

は蓋し千古の金言である。

ろれから、身體の強健である、今も忘れ無いが、入營の當時、入浴場に於て、骨節の逞い、ろして肉の福々した赤體を見、これに反して新兵の身體が一見して故兵と區別せらるゝまでに大懸隔のある事を思ひ、これが一年更に一年練磨を重ねるうちに、又次の新兵を驚かすまでに、強健になさるゝのかと思へば、實に自分乍らに頼母敷い、たとひ今は、故兵に劣るにしても、ナニ己れも決して負けね程になると言ふ望と自覺を有するが爲め大に愉快を増した。

在營中市内の壯丁身體検査所に參つて、其體格のあまりに劣等にして、矮弱なるに驚き、國家の前途に向つて、尠からず杞憂を懷いた事であ

るが、寔に寔に心細い次第である。

身體は實に、吾人の靈能を包む處の金城鐵壁である又我々の武器と考へても宜い、若し此身體が、平素虚弱にして事をとるに堪へず、自由なる活動が出来ないならば、我々より武器を奪はれたと一般、決して目ざましき働きは出来ない。

生を愛し身を護るは、吾人が天上に對する重き役目の一つである。

自ら疾を購ひ、自ら疾病を作爲するが如きは、實に天下の大罪に中る事にして、人の最も耻辱となすべき事である。

我等の身體は、鍛練によつて、強壯になり、琢磨によつて雄大になる事は、故兵と新兵との比較によりて充分に説明せられ、尙ほ、自分の

身體に就て最も明かに、最も確に證明せられて居る。我等の精神が大に成長發達して發展すると共に、身體も相伴つて雄大にならねばならぬ、たとひ、兵學は、進歩しても、精巧なる武器を揮ふ事が出来ないならば、洵に遺憾千萬である、我等は少くとも、身を養ひ、生を愛し、死に至るまで此身を成長發展せしむるの覺悟を要す再言す、強健なる身體は、精巧なる一種の武器なり。

(その三)

次には清廉である、勅諭にも「心誠ならざれば、いかなる嘉言も、善行も皆うはべの飾りにて、何の用にか立つべき、心だに誠ならば、何事もなるものぞかし」とある。

世に貴いものが、澤山あるにしても、精神の潔白なる程貴いものがあ
るだらうか、決して軍人のみ潔白となるべき筈のもので無い、何人も
潔白にあらねばならぬ。

自分は屯營の窓から、み空にかゝる月を見るにつけ、ふりつもる雪を
眺めるにつけても、ア、彼のように清くなり度い、ア、此の様に潔白に
なり度い、と幾度か思つたか解らぬ、而して、實に是れ我等が日々求
めて止まざる一の理想である、軍人の如きは尙ほ更ら潔白であらねば
ならぬ、即ち榮譽利達の上に超然たるを要する。

歴史は巡る幾千年、讒佞欺負の徒にして、成功したものが、一人でも
半人でもあるか、偶々姦邪憚惡の輩にして、世を蔽ひ、人を壓し、自己

の私慾を逞ふし、世慾に飽いたものが、あるかも知れぬ、が然し、其人自らは、或は幸福と思つたかも知れぬ、遮莫、これが成功だと考へたら間違ひである、よしこれを成功と許しても、失敗的成就、不潔なる成功、耻づべき成功にして、光榮ある成功などは夢にも言へぬ、古への聖者も教へたでは無いか、「心の清きものは福なり」と。已に心に濁る泉あり、既に胸に疚しき雲あらば、人の人のなす所はまことに察すべきである、清廉！此れ實に吾人を磨いて光榮を露はさしむるの寶石である、何人もこれを貯へねばならぬ。

(その四)

次にはこゝろの整然たる事である、心の影は、いろくの方法によつ

て、外面にうつる、心が五里霧中に迷子となつて居ては、實に危険至極である、我々は心に明光を放たねばならぬ。此事に就ても軍隊で學ぶべき事は多い、見給へ官給の被服を整頓するにしても、自己の服装にしても、五月蠅まで、ヤレ、釦が何うの、ヤレ襟布がどうの、帽子の被り方が、曲つて居るとか、整頓の仕方が悪いとか、何故うれはごに、八ヶ間敷、而も慘酷に言ふのだらうと思ふものもあるかも知れぬが、これは大の誤り、すべて物品の整頓を正然とするべく八ヶ間敷言はる、事は、やがて心の整頓を學ぶべき直接の教訓である、心の整頓を第一にして、次で形の整頓に移るのも、形の整頓から學んで了して、こゝろに移るのも、つまりは一つである。

其外例へば、時間の如きも頗る嚴格で、何かの爲めに後れる様な事があつてはならぬ、一度命令を發した以上は、必ず其時間に事を間に合せらるのだ。

時間の貴重なるは、今更ではないけれど、痛切に感じるものが少い様である、見給へ、日本人の諸々の集會の狀態を、時間通りに整然とやつて居るものが、どれだけある、即ちこれは正規の時間に集まらぬと言ふ、個人の不徳義に基するので斯かる惡習慣は、斷じて打破せねばならぬ、少くとも我等は、時間の貴い事を直覺して、しだらなき惡習慣を革めねばならぬ。

最後の五分間で勝つのだと、ナポレオンは言つた、かれが勝利の秘訣

はこれである、若し兩軍が戰に望む時、五分處ぢやない、一分間の遅れで、勝つべき筈の戰爭が、負けになるが如き事が少くはないこの事であるが、實に刹那の光陰が、生死、勝敗の問題に關する事を思い來れば、寸陰の吝むべきは勿論の事である。

約束はして置いたけれども、雨がふるから廢うとか、少しは後れても、宜いだらうとか言ふ不整な習慣も斷じて改めねばならぬ。

明日は、何時の出發と言ふ命令が下ると、假令、雨がふつても、火がふつても（降つた事は無いが）出發する、此精神は實に貴むべき事で、言を二にせぬ事が必要だ。

心の整然たる人は、形が整然として居る。

しだらない程見苦しいものは無い。

試に家庭を注意する人は、迅く心づけるなるべし、塵は山の如く積り、古着や、垢つきものが、彼方の隅にも、此處の角にも、横つて居、物品の置き處も定まつては居らず、何の整頓も、何のとりまどめもせず、何か探すと云へば、大騒ぎして家内中のものが、斥候の様にも搜索しなければならぬ様では、實にこまる、斯かる不始末では、いくら廣い家があつて、いくら道具が、僅少でも、キチンと整頓する事は無い、何となれば、其人らのものが、已に秩序を失つて居るからである、自分の側りには、ヤレ家政學・ヤレ育兒法、ヤレ料理の手引草などの、書物が亂妄狼籍に横へられ、其中に腰巻き一つになつて、横臥

し兒に乳房を啣ませて、流俗謳をどなつて居る、廚の方では、女中が卵焼きを盗み食し、小兒が戸柵から菓子折を懐にして逃げ出す様な家庭に、何の秩序がありませんか、秩序なく取締なき人は斯かる家庭を製造するのです、之に反して、心の整然として、順序ある人は、其爲す事、營む事、悉く心に一致して居る、質素なものでも、亂さずにキチンと着る、錦着て大肌脱ぎで居るより、何れ丈け高尚であるか分らない、家狭く道具多しとて、秩序が立つて居るから、決して亂れはせぬ、清潔に掃除が行き届く、これ實に我々の理想として守るべき事柄ではあるまいか。

その次は單純質素である。

見給へ、ソクラテスは「最も僅かで満足が出来る人程神に近いのだ、」
と言つた、これ眞に味ふべき金言では無からうか。

あゝ單純質素なる生活、これ確かに吾人が守るべき方法だらうと信ず
る。

複雑と言ふ紐は、人を結んで殺す處のものである、紊亂は實に吾人の
避くべきものである。

人よ思へ、複雑と言ふ言葉は、已に業に、吾人に不快なる感覺を惹び
起さしめるでは無いか。

見よ、複雑なる家庭、複雑なる人格、複雑なる成功、複雑なる事業、

いかに不快の感を起さしむる事よ。

單純質朴は、實に軍隊に於て、遺憾なく發揮せられて居る。

人の境遇には元より千差萬別はあるけれど、大能の目より見れば、決
して表裏上下のあるもので無い、軍隊の如きは、華族の令息も、百姓
の權平の倅でも、同じ衣物を着一つの面盆の飯を食み、同じ寢臺に臥
し、同じ言語を使ふので、言はゞ我々の理想的だ。

質素にして單簡。これ確に吾人の胸に印刻すべき寶なり。

複雑にしてどれ丈けの利がある、どれ丈けの得があるか、日に衣
を更へ、朝夕に食を撰び、一つの舌を二枚に作用し、一つの心を裏と
表に見せかける、甲に話すに甲の顔付を見て談し、乙に語るに乙の手

つきに従ふ、夫は妻に匿し、妻は夫に忍ぶ、豈天下これより複雑なるものがあらうか。

絹布ならでは、着ず、車ならでは出ず、美味佳肴にあらざれば食はず、天下豈これ程困つた代物はなかるべし。

思へ、彼の人は複雑な人だと聞いては、交る氣がせぬ、なるなら逃げ度い、六ヶ敷人であると承つては、接待する氣にならぬ、舌が複雑

であると知つては、もうお話相手をご免蒙る、顔色のつかいわけも眞平である。

單簡質素、これあらゆる方面に於て修むべき要件ならずや。言葉も單簡にして質素なるべし、これに七重八重の衣を飾られては、

言ふものよりも、聞くものが迷惑なり、人に迷惑を掛けるは、宜しき事にあらず、軍隊に於ては、此事が痛快に實行されて居る、不要の言は、立ち處に取り消しを命ぜられる。

「エー、それから、アノ……………」
なんて言つて居ると。

「それからなんて要らぬ」
とやられる、時によると。

「いたしたのでムります」
「ムりますは要らぬ、」

と動詞まで削減される。

思ふに人は最も簡單なる言葉を以て、最もよく我意を言い現す事は、殊に大切にして、又最も貴重なる方法ではなからうか。

言葉の光澤は無い方がよい、飾は無論要らぬ。

我等の理想は、然り々々、否々の二つで通し度い。

軍隊で何か上官に報告をする、と、それで宜ければ、只、

「よし」

悪ければ、唯、

「いけない」

これ丈だ。

ア、これ實に我々の理想として守るべき事柄にはあらずや。

(ろの六)

次は熱心である。

我れ聞く、周公の輔相と爲るや、其賢人君子を見るに急なる、一度食

するに方つて、三度其哺を吐き、一度沐するに三度其髪を握つたと言

ふ、其熱心にして忠實なる惟るべしである。

身分も痛切に感じた。

若し軍隊でやる仕事のうちで、只の一つにも熱心なしに遂げらるゝも

のがあるだらうか、射撃も、教練も、銃剣術も、體操も、熱心がない

なら決して成功せぬ、進歩せぬ。

即ち熱心は、成功し、成就する母である、古人言へらく、「事の熱心な

るは、幸福の基なり」と。

怠らず行かば千里の外も見む

牛の歩みのよしおろくとも

千里の道も一步よりせざるべからず、一步は即ち千里に一步丈け近けるものである、遠いと見た事も、高いと観じた事も、熱心にやつて止まずば、達する事が出来る。

彼は性敏にして慧、而し輕薄にして熱心なし、此人は天賦鈍にして迂なり、されど恐るべき熱心方を貯ふと言ふ二種の人があるならば、自分分は寧ろ後者が頼母しい、何となれば、前者は何事も遂になすこと能はざるも、後者は何れの日か、大に發明する處あるを思へばなり。

(ろの七)

最後に自分は、言ひ度い。

それは信仰の問題である。

自分は、普佛戦争の際ビスマークが最愛の妻に與へたる書翰、ゴルドン將軍傳、ロバーツ卿、ガーデナー大佐傳、ヘツドリ、ヴ井カーズ等の書を読み、いかに、大能の力が、かれらの上に大なる力の雨として灌がれたかを見ぬる。

ビスマークの彼が出征中妻に與へた書を見るに、戦勝の報告には、必ず神の惠恩によつて我軍勝利を得たりとか、神若し許し給はゞ今後我軍を勝たしめ給へとか、神の御庇護の下に在りとか、子供共によろし

く、又おん身も深く神に祈りておん身の憂慮を慰せられよ、等の言葉が必ず一書のうちに含まれて居る。

ア、動もすれば、我が勝ちに乗じて、驕慢の心を生じ、私の竦腕を誇りたがるもの多き世に、彼は勝利を全く神の力に歸して居る、敬虔の念のいかに深さかを察するに足る。

ピスマークは、戦場の事繁き間にあつても、常に妻に書を致し、倉匆予はペンを墨に浸す暇なき故に、鉛筆にて書すと云ふ程に、多端なる時にも、書を齎して、妻をして憂慮をなさしめざらんとする、其愛情の濃なるは、實に人をして羨望せしむるでは無いか。

ロバーツ卿は常に祈禱を以て動いて居る、喜望峰を迂りて本國の方に

航するに方り、諸司令官に書を送つて、野戦軍の士官、下士、兵卒に簡單なる祈禱文の頒與を願つて居る、敬虔の念深きゴールドン將軍は、清國大平の亂を征伐して、偉功を奏し、英國に歸りたる後日曜學校の兒童を教へ、貧兒を救ひ、病院を訪ひ、工場を見舞ひ、無告の賤民の爲めに勞したる事数をしらす、衣服なくして寒に泣ける、水夫を見て、自己の衣服を抜ぎて彼に與へ、自ら襦袢一枚となりて、家に歸つた事がある、ゴールドン將軍が常用の聖書は、其後ヅ井クトリヤの手に置かせられた、ゴールドン將軍の銅像は、倫敦の聖保羅大堂にある、一冊の聖書を手に握つて立つて居る、聖書は、時に戦場に奔走するものには、荷になる事があるので小形のを衣囊に入れらるゝ様にして南阿遠

征の軍隊に寄せられた事があつた、總司令官ウラルズリー卿は大に此舉を賛嘉して、此書の巻頭に序文を掲げた。

『予の見る處では、生死の境に馳驅する兵勇に對し靈的慰藉を與ふるに此小聖書より善きはなし、苟も一冊を所持するは、所謂世の元帥指揮杖よりも更に大なる價值あるものを携帶するものなり』

セントヘレナに光なき日を送りし、ナポレオンは、ある時、傍人に告白して曰く、

『ア、我は終に遂にナザレのイエスには、及ばなかつた、彼は僅か三年の間傳道して、ろして十字架にかゝつたのであるが、其事業は千萬載に涉り宇宙に汎く擴瀾して居るのに、我は數十年を費して

震天動地の大騒動を行ひ乍ら、殘す處は何ものぞ、沙上を杖で攪拌したることく消れて痕なし、ア、若し我れ天下の英雄とせば、彼は正に神人である、』

ア、頑固なる、那翁すら、斯く自白したでは無いか。

天地の大靈に合して、其完全が如く、自己亦完全なるべしと云ふ事が、人間の理想であるならば、軍人と雖も矢張り此信仰が要る、信仰は實に人間の生命である、信仰なき人は、遂に光榮の地に達することが出来ぬ、劍を揮ふ時にも神を懷ひ、血腥き戰場に憩ふ刹那にも大能に向つて祈る、而して勝利を維れ神の業に歸するに至つては、慥に其人の高風敬虔の情がいかに厚いかを察することが出来る。

西郷南洲翁は曾て言つた。

『道は天地自然の道にして、人はこれを行ふものなり、故に天を敬するを以て目的となす、天は人も我も同一に愛す、故に我を愛する心を以て人を愛すべし』

と、又曰く、

『人を相手にせず、天を相手にせよ、天を相手にして、己を盡し、人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ねべし、』

と、蓋し味ふべき言葉だと思ふ。

自分は信仰の問題に就ては、何れ他日を期して、陳ぶる處あらんを望むが、少くとも此れ丈は、述べて置かねばならぬ。

飾らず、偽らず、赤裸々たる。胸臆より出でたる一言隻辭は、能く他人の

心裡に強き響を興へて之を動かさん

カーライル

玉 霰 終

明治四十一年六月廿八日印刷
明治四十一年七月一日發行

發行兼
印刷者

東京市麴町區隼町四番地

小林又七

(電話番町千六百二十九番)

陸軍省構内

印刷所

小林又七工場

(電話新橋九百四十一番)

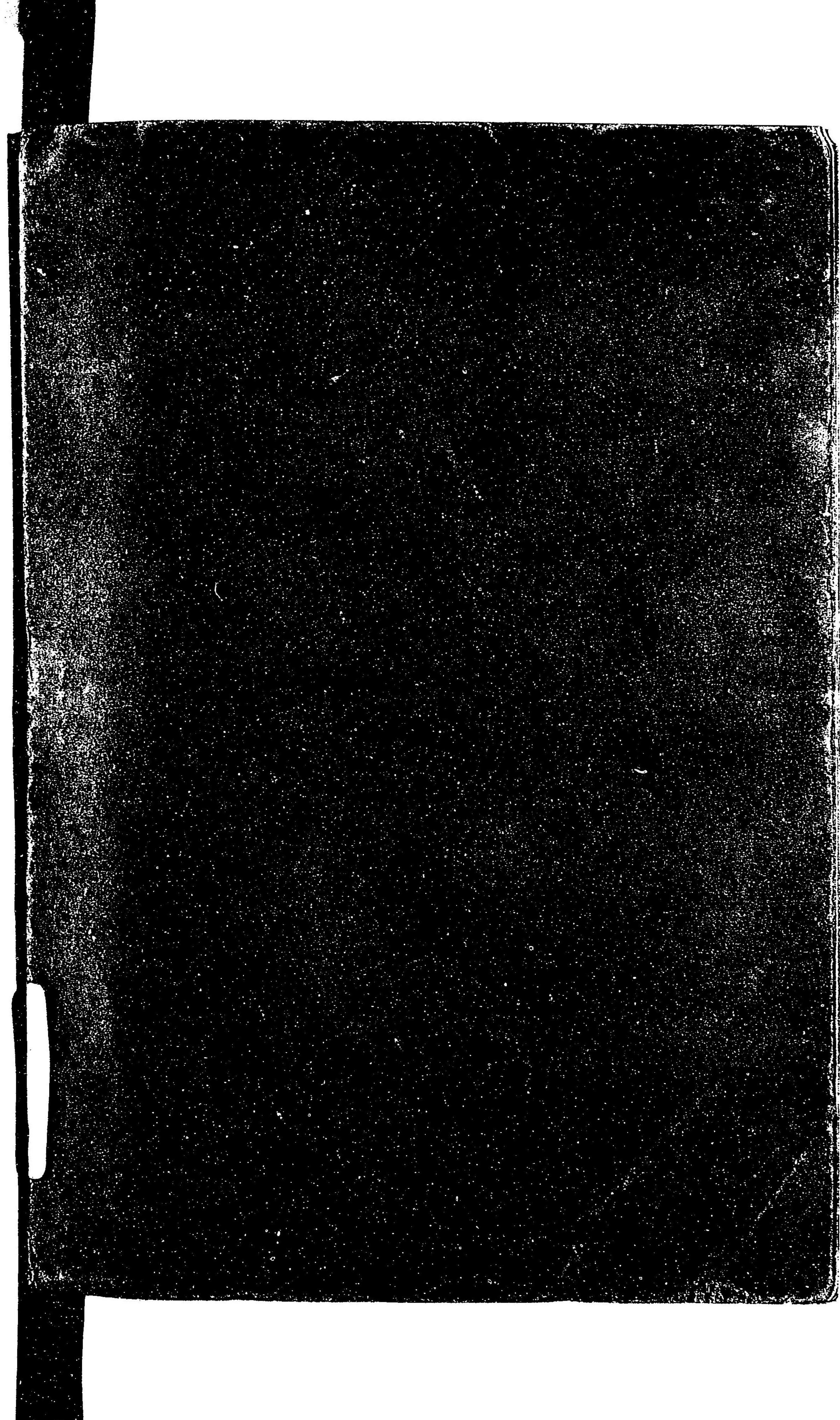
不許
複製

發賣所

東京市麴町區隼町四番地

川流堂 小林又七

(電話番町千六百二十九番)



051115-000-5

特63-420

玉霰

川流堂

M41

BFA-0291

